

ふるさとの先人は、もっとも身近な地域経営の素材

どうもんふゆじ
童門冬二◎作家

北は北海道から南は九州・沖縄まで、どのような地域でも、ふるさとの先人や、その先人にまつわる事件・出来事は必ずあります。

それを火種として掘り起こすことができれば、これほど、身近で、分かりやすく、安上がりな地域経営の素材はありません。

また、歴史は人類の知恵の宝庫です。人づくりや心そだてなど教育の身近な素材になりますし、愛郷心と申しますか、ふるさとを愛し、ふるさとに誇りを持つための格好の素材でもあります。

ですから、ふるさとの先人、地域の歴史・文化という素材は、まず地域でその火を煽り立てることで、地域にやる気と元気を生み出していく。次に、そのような火種をおこしている地域同士が交流し、情報交換し合うことによって、相乗効果が生まれ、火種は火の塊となって、それぞれの地域をより元気にする。そして、ひいては、日本中を元気づけていくことができるのではないかと考えています。

また、私は、江戸時代から東京に住む家に生まれました。しかし、現在の東京一極集中にはかなり以前から疑問を持っています。その問題点を解決するには、東京のもつ機能を分散させることもひとつの道筋ではありますが、

「地域が、元気づくことによって、東京を包囲する」

ということが、より大切な一本の道筋だと考えています。そして、そのひとつとして、

「各地域の自慢する歴史上の人物の業績」

を、その地域だけの財産にとどめるのではなく、思い切って、共有の財産にすることができれば、地域の元気の元気づけになり、東京一極集中にも大きな楔〈くさび〉を打ち込むことができるのではないかと考えています。

『平成19年度嚶鳴（おうめい）フォーラム報告書』より

無断転載はご遠慮下さい。